

消防トピックス

●●● 中学生に対する防災スクール ●●●

横浜市神奈川消防署

1 はじめに

横浜市神奈川消防団は、昭和14年に子安消防組と神奈川消防組が統合、神奈川警防団として太平洋戦争中の防空消防に活躍しました。

昭和22年に、消防組織法の制定により横浜市消防団条例が公布され、神奈川消防団が誕生し、現在は1本部・9個分団・定数430人で構成されています。22棟の器具置場に16台の積載車、25台の小型可搬式ポンプを装備し、水火災や地震などの災害対応、防火・防災・応急手当指導等の防災指導、訓練や資機材点検を実施し、昼夜を問わ

ず神奈川区民の安全・安心を守っています。平成24年10月に発表された「横浜市地震被害想定調査報告書」では元禄型関東地震が冬の18時に発生した場合、火災による焼失棟数が11,802棟と市内で最も多い地域と想定されたため、神奈川区全体の防災意識も高く、団員数は常に90パーセント程度の充足率を確保しています。

特に、女性消防団員の活動は非常に活発で、毎年確実に団員数が増えており、現在では約15パーセントと高い構成率となっています。



神奈川消防団夏季訓練会で可搬式小型ポンプ操法を実施する女性消防団員

2 横浜市神奈川区の紹介

神奈川区は、昭和2年に横浜市の区制施行により誕生しました。

鎌倉時代は「神奈川湊」、江戸時代には東海道の宿場町「神奈川宿」として栄えるなど、古くから交通の要衝として発展しました。明治時代後半から海面の埋め立てが始まり、京浜工業地帯の一角へと発展するとともに、商店街の発展や住宅地の開発が進みました。

横浜市の都心臨海部と新横浜都心の一角を占め、JR線、京浜急行線、東急東横線、市営地下鉄ブルーラインの14の駅があり、交通の利便性がよく、人口は約23万人にのぼります。

区内は、大きく「臨海部」「内陸部」「丘陵部」の3つの地域に分かれ、「臨海部」では、埋め立て地などに大規模工場や高層マンションなどが多く立地し、「内陸部」では、起伏のある地形に住宅地が広がっています。「丘陵部」では、緑地や農地が多く残り、キャベツなどの栽培が盛んに行われています。

また、神奈川区のマスコットキャラクターは、神奈川区に残る浦島太郎伝説の亀にちなみ、「かめ太郎」です。



平成26年神奈川区消防出初式で市民を迎える神奈川区マスコットキャラクター「かめ太郎」(左)と横浜市消防局マスコットキャラクター「ハマくん」(救助隊バージョン) (右)

3 防災スクールの実施

防災スクールとは、消防団員募集活動の一環として、神奈川区内の公立中学校に呼びかけ、中学生が消防団の実施する防災指導を体験するものです。

これにより、中学生に防火・防災の知識習得と同時に、地域防災に寄与する消防団活動をじかに見つめる機会を作り、将来の消防団員への入団促進へつなげる活動です。

(1) 取組の経緯

神奈川消防団は、団員募集活動を地域行事でのチラシ配りやブースの設置、自治会・町内会の掲示板へのポスター掲出等の従来のPR活動を行っていましたが、効果はあまり上がりませんでした。

そこで、短期的な募集活動だけでなく、中・長期的な募集活動の一環としても取り組む必要があり、消防団員を育成するという主眼から「防災スクール」が始まったものです。

現在は、区内の横浜市立菅田中学校で実施しており、平成18年度から始め、平成25年度で8年目を迎えています。

(2) 実施内容

防災スクールは、学年ごとに項目を変えて3年間で全項目を勉強できるように実施します。実施項目は下記のとおりです。

- 1年生：三角巾・ロープ取扱い
- 2年生：搬送法・携帯発電投光機取扱い
- 3年生：心肺蘇生法・AED取扱い

項目ごとにタイムキーパーを配置し、進行状況を管理することで中学生でも飽きのこない、集中した教育を実施します。

また、短い時間に効率的に指導できるように、あらかじめ指導に当たる消防団員の勉強

会を開催し、指導者のスキルアップと、指導内容の均一化を図っています。

(3) 実施した団員の感想

事前の勉強会は、知識・技術に磨きがかかるのがよくわかるようでとても好評です。

その他、コミュニケーション能力の向上や、「教える」ことへの不安の解消がよく聞かれます。

一方、本番の防災スクールでは、時間も人手も足りないのが悩みです。ポイントを絞ったり、タイムキーパーを置いて時間の管理を行っていますが、中学生 10 名に対して消防団員 1 名程度の割合なので、今後は先生方との意見交換なども積極的に実施して総合的な見直しを行いたいと考えています。

(4) 実施結果

消防団員が講師となって中学生を指導することにより、指導者の自覚と消防団員としての責任感が確立されました。しかも 3 年間で 1 サイクルとして、同じ項目を集中的に教えるのでスキルアップも大幅に向上し、勉強会を通じて分団の枠を超え、団員同士のコミュニケーションも充実して情報の共有化も図られています。

菅田中学校では、この「防災スクール」が

8 年続いていることで、今では学校の主要行事の一つになりました。平成 25 年度には、防災スクールを全項目体験した中学 3 年生が、初めて、それぞれの母校（小学校）で行われる震災訓練に参加し、地域住民と一緒に訓練を行いました。訓練当日は、各小学校 6 年生も避難者として参加し、先輩の活躍する姿を目に焼き付けていました。

4 あとがき

参加した中学生からは、「今回のような訓練を通じて、実際に大規模地震が発生した場合の対応法を学べたので、あらためて防災訓練のたいせつさを知りました。防災スクールを通じて消防団員の、動作の一つ一つがとても丁寧で的確なことに驚いています。ぜひ見習いたいと思いました」などなどの感想をいただきました。

また、横浜市立菅田中学校の大場校長先生は、これらの活動は「中学生が、地域のつながりを強くする場所として、子供たちが活動できることは大変素晴らしいことなので積極的に取り組んでいます」とのコメントをいただき、消防団活動への御理解と強い後押しをいただいています。

訓練に参加する中学生の姿は、地域住民からと



心肺蘇生法と AED 取扱いを訓練する中学 3 年生の生徒たち



携帯発電機と投光器を学ぶ中学 2 年生。生徒たちの健康管理もたいせつな指導項目の一つである。話し方や姿勢、指導場所の選別等も勉強会で学ぶ項目の一つ



でも好評で、確実に地域のつながりを強くし、防災スクールの当初の目標を超え、新しい地域防災力の担い手として期待され、あとは、消防団への入団を残すのみで、今や遅しと待ちわびているところです。

最後に、この文面をお借りし、この度の寄稿に御協力いただきました横浜市立菅田中学校の皆様感謝申し上げます。



地域防災拠点訓練で行われる搬送法の訓練。今年で初めての取り組みであり今後の展望に期待がよせられている。



地域防災拠点訓練で行われる応急手当（三角巾）の訓練。手前に座っているのは小学6年生で、来年春より菅田中学校1年生として防災スクールに参加する予定。避難者役を兼ねて先輩中学生の活躍を見守る。